

Tokai Fubokon Letter

第41回父母懇談会 記念講演

鈴木敏夫氏 (スタジオジブリプロデューサー)

「プロデューサーの流儀

～ジブリ作品・ジブリパーク誕生の舞台裏～

先日の父母懇談会で行われた、本校OB鈴木敏夫氏の記念講演の様子をお届けします。

この講演は6月11日に、全国のFMラジオ番組「鈴木敏夫のジブリ汗まみれ」でも放送されました。終了後は(少しおいてから)ポッドキャストでも配信されますので、聞き逃した方もまだお楽しみいただけます。

また、講演後にもインタビュアーの3人とともに、引き続き楽屋インタビューを行いました。併せてお楽しみください。

最後にインタビュアーの3人にも感想を聞きました。鈴木さんのカリスマ性とエスプリの効いた講演を、間近でしっかり受け止めた彼らの昂ぶりがよく伝わってくると思います。



撮影:荒木経惟

鈴木敏夫プロデューサー(以下鈴木 P):スタジオジブリの鈴木です。今日はこの講堂で講演会をやるとは知らなくて。ちょっと感動してる。というのは、自分が中学・高校とここ(注:東海中高)の出身で、僕らの頃はこの講堂でいろんな催し物があった。一つは世界の映画、それも名作を見せる会があって、僕は必ず来ていた。二つ目には狂言。太郎冠者がどうした、次郎冠者がどうしたっていうやつ。その催し物もこの舞台上で行われた。「世の中にこんなものがあるんだ!」ってすごい興奮したのを覚えて。すごい思い出の場所。そこに今自分がいると思うと、ちょっと興奮しますね。

今日は女性の方が多いけれど、もちろん僕らのときは男ばかり。もうひとつ思い出した。ちょうど高校生ときの文化祭。自分たちでシナリオを書いて、演劇大会をやるのがこの場所だった。本当にひどいシナリオを書いてここでやりました(笑)。

僕のお袋がすぐ近くにある筒井小学校出身だったこともあり、懐かしくてここに来る前に近くを歩いてきた(笑)。今日は4人でいろいろ話しながらやりますから、よろしく願います。

インタビュアー

古屋敷祐音君:東海高校2年

高尾和来君:東海高校1年

岡本紗輝さん:椋山女学園大学1年



—「プロデューサー業」

古屋敷:では早速質問に入りたいと思います。「監督」とか「プロデューサー」の言葉の違い、「監督」とはどういうもので、「プロデューサー」とはどういうものか、仕事の内容の違いについてお話をいただければと思います。

鈴木P:想像してたことある?

古屋敷:「監督」が映画を作って、「プロデューサー」がそれを宣伝したりとか広告したりとか、それを全部まとめたりする、みたいなイメージなのかなって。

鈴木P:基本的には合ってる。一番最初に「何を作るか」、話し合う。さっき楽屋で『風の谷のナウシカ』という作品のことを話していたんだけど、実はその当時僕はプロデューサーではなく、雑誌の編集者をやっていた。宮崎駿という人と知り合ったのが1978年。『ルパン三世カリオストロの城』という映画ができた頃。この映画は、今から44年前、宮崎駿が初めて作った映画作品。本当にいい映画なんだよ!(会場から拍手)。今日の話聞いて、ぜひ機会があったら見てください。

でも実はこの映画作品が公開されたとき、お客さんがまったく来てくれなかった。映画って、作るのにすっごくお金がかかる。封切ってお客さんが来ないと、何が起こるかという、切ないというか、体をちっちゃくしていないといけない(笑)。彼は真面目なので、映画の興行成績を気に病んで、スタジオに居づらくなって、「もうアニメーションは二度とやらない」と言ってやめたときがあった。

そんなときに宮さん(=宮崎駿監督)に相談された。「俺にも家族がいるから、生活がかかっている。一緒に何をやったらいいか、考えてくれないか」と。僕は映画プロデューサーの前は、雑誌の編集長をやっていた。宮さんは絵も描けるし、お話も書けるので、「出版はどうか」と提案した。そうしたら彼が「絵本はダメかな?」と。「絵本? いいですけど…」と答えると、「絵本描いたら、家族4人やっていけるかな?」と聞かれた。僕は「あ、



無理です」って言った。「世の中そんな簡単なものじゃないです」って。当時絵本はなかなか売れなかった。

そこで僕は、『アニメージュ』という雑誌をやっていたので、「マンガをやってみませんか?」と提案した。もしかしてヒットしたら家計の助けになると。「じゃあ、何描けばいい?」と彼に言われて、いろいろ相談が始まった。いま、何を描いたらお客さんにアピールするだろう?と考えた。宮さん本人は、少し自信をなくしていた。その頃の日本のマンガは、あだち充の『タッチ』が空前のヒット中で、「ラブコメ」全盛期。日本中のマンガがラブコメになっていた。そんな時代に僕は「ナウシカ」を提案した。「日常からちょっとはみ出たようなものが流行っているけれど、だとしたら全然ちがうアプローチで壮大な物語を描けば、その方がうまくすればヒットしますよ!」って。たとえば、ギリシア悲劇とか。宮さんは「(ギリシア悲劇について)オレ知らない」って言うから、「勉強してよ」と(笑)。

しばらくして宮さんから連絡が来た。「鈴木さん、『風の谷のナウシカ』ってどうかなあ?」って。あとは皆さんご存知だから細かい説明はしません。ナウシカは、あるギリシア悲劇の物語の中の人物の名前なんです。それと「虫愛づる姫君」。要は、僕がひと言発して、そこから思いつく。これで映画を作ったり、マンガを描くことになる。僕は編集者だったけど、やってたことはプロデューサー。宮さんが勝手に作るわけじゃない。だって彼が勝手に作るとお客さん来ないから(笑)。それでは困るわけ。とにかく見張り役。だから、「当たりそうな企画を作って!」と言う。

古屋敷:プロデューサーがこういうふうやってってお願いしたら、監督がやる?

鈴木P:そう。しかもどのぐらいのお金をかけてやるのか、全部話し合う。それで出来上がるのを待つ。遅い場合はお尻を叩く。マンガの場合、僕は編集者。「編集者と作家」という関係なんだけど、それは映画に置き換えると「プロデューサーと監督」。

— スタジオジブリの立ち上げ

鈴木P:ジブリを作るときの話をしましょう。宮崎駿、高畑勲、と僕の3人でジブリを作ろうってことになった。作るのはいいいんだけど、誰が何をやるかという問題がある。宮崎駿にとって高畑勲は先生みたいな存在。だから、宮さんは「高畑さんと僕(=宮崎駿監督)は監督だから、鈴木さんがプロデューサーかな」と。面倒臭いことを全部押し付けようって(笑)。ところで、高尾君はなんでプロデ

ューサーやろうと思ったの?(注:楽屋での話から)

高尾:自分の発想とかを、もっとすぐしてくれる人に託して、それがどうなっていくのを見守っていくのが、なんかすごい面白そうだったから。

鈴木P:面白いね。そんな発想持ってるんだ。だったら、編集者が向いてるよ。あのね、参考までに。欧米では、偉いのはプロデューサー。監督は雇うもの。プロデューサーが自分でいろいろ考えて、ある監督にやらせて、駄目だったら首切っちゃう。実を言うと一番偉いのはプロデューサー。なんか僕自慢してるみたい(笑)。

— 女の子のキャラクター

岡本:ジブリ作品には自立した女の子のキャラクターがいっぱい登場する。自分を持っていてカッコいいなあと思って見ていた。そういうキャラクターを作るときに、どういうことを考えながら、どういう思いを込めて作っているのかなど。

鈴木P:揚げ足をとると、今こういう言葉を使ったでしょ。「どういう思いを込めて」って。実を言うと、思いなんか何にも込めない。日本の歴史を見ていくと、女性が元気で、男が情けなかった時代がある。いまNHKで大河ドラマ『鎌倉殿の13人』をやっている。主人公は、表面上は北条義時だけれど、ほんとうは北条政子。日本の歴史上、ずっと悪女って言われてきたけど、「単なる悪女じゃなかった」ということをどうやって出すか、そこに目をつけた。

ジブリで『ナウシカ』作ったでしょ。『ラピュタ』、『トトロ』、『火垂るの墓』、『魔女の宅急便』をやることになった。それがちょうど平成元年。その後も、『おもひでぽろぽろ』…。なんか世の中を見てて、ここから女性が元気になるんじゃないかなど。吉祥寺で『おもひでぽろぽろ』を作っていた頃、僕の席は窓際にあった。「窓際」って言う誤解を受けるけど…(笑)。窓から下を眺めると、デート中のカップルで先に歩いてたのは全部女性だった。男はついて行く。そこで思った。世の中変わるって、こういうことで発見する。つまり「女性の時代が来る」となんとなく感じていた。世の中自体が変わっていくってこと。気がついたら平成の30年間、ジブリは女性を主人公に作り続けることになっちゃった。おかげさまで、いろんなお客様がそれを支持してくれた。

現実の世の中は、この30年間で、女性がどんどん元気になっていって、男はだんだん元気をなくしていった。これは僕の感想で、おそらく多くの人がそう思ったんじゃないかと思うんだけど。そういう30年間じゃなかったの



かなあ。だから、思いを込めたんじゃない。世の中のそういう変化を見ていた。だから女性の主人公で作ろうと思った。宮崎さんは男の子を主人公にしたって言っていた。僕はそういうときにはいつも、「当たらないからやめましょう」って冷たく言い放つ(笑)。見えてきた？ プロデューサーの役割。割とプロデューサーの方がそういうことを考える、ということを書いたかったんだけどね。

— 人の個性を見抜くコツ

高尾: プロデュースの過程で、相手がどういうのが向いているんだろうとか、これを作らせたらすごいものができるんじゃないかと考えると、人の特性、適性、個性を見抜くことが大事だと思う。そういったものを見出すために心がけていることはありますか？



鈴木P: わかればこんな楽なことはないけど。だけど、考えなきゃいけない。さっき宮崎駿の先生は高畑勲だと言った。2人は同じジブリで映画を作ってきたけれど、個性でいうと全く対照的。高畑勲という人は、物事を「論理的」に考え、一方、宮崎駿は「直感」の人で、キャラクターに「思いを込める人」。だから、見ている人に感情移入を求める。片や高畑さんは、どこまでいっても主人公に感情移入せず、やってることをずっと見てみたい感覚。そういう違いが頭に入っていると役に立ったことは確か。

難しいのは、単に論理的、情緒的、どっちがいいかってなんとなく思いがちだけど、論理だけでも映画は作れないし、情緒だけでもだめ。やっぱり両方をどうやってうまく使いこなすか。そこから辺に答えがあるような気がする。

僕が心がけてきたのは、宮崎駿の読む本、高畑勲の読む本を全部読むこと。2人は本の読み方がまるで違っていた。違ってはいたけど、まず心がけたのは、彼らの読んだ本を追体験で僕が全部読むこと。その本を読むことが、彼らに近づく大きなきっかけだった。どこまでいっても本には二つの要素がある。豊かな感情を育てる面もあるし、一方で物事を論理的に捕まえる能力を育成することもできる。そういうことじゃないかなって気がする。

— ジブリパーク

岡本: 11月にジブリパークが開くと聞いて、もうすでに友だちと行く約束をした。なんで愛知県にできるのか、そしてジブリパークの一番の魅力をぜひ聞きたい。

鈴木P: 僕は名古屋出身で、愛知県には愛着がある。一方で、いろんなところからジブリパークをぜひやりたいという声があった。そういう中で、愛知県に決める決

手は、なんだったんでしょうね(笑)。ジブリパークをどうやって作るか、実は僕らもいろいろ話し合いました。一番考えたのは、東京にはディズニーランド、大阪にはUSJと、アトラクションを中心にしたテーマパークがある。ジブリをテーマにしたテーマパークをやるのはいいけど、でもどうなんだろうって。現在モリコロパークを利用されている方たちの邪魔をしちゃいけない。アトラクションを中心にしたテーマパークを作ったら、今楽しんでいる人はもうそのようには楽しめない。おそらくモリコロパークをやるとしたら、いま楽しんでいる人たちの邪魔をしないような形にする方が、みなさんにいい感じで受け入れてもらえるだろうと、そういうふうに考えた。

というわけで、愛知県と、それから中日新聞と一緒にやることになって。そして気がついたら、早いもので、もうできちゃう。ぜひできたときには来てください！

あと一番大事なこと。入場料をどうするか。第一に、楽しんでいる人もいるんだから、そして愛知県も関わるんだから、普通のテーマパークに比べて安くします！と。これは同意を得た。

それからもうひとつ。何人のお客さんが来るかは、ほんとうに予測がつかない。だから

さんざん考えました。その結果、「予約制」に決めました。そうすれば、混んでるとか心配しないで行くことができる。放っておくとたいへん。要するに警察の警備体制をどうするか、何人来るかわかってないと、その体制が作れない。だからいろいろさんざんみんなで相談して、「予約制」という形にさせていただきました。そうすれば、みなさんちゃんと事前にチケットを手に入れば、当日はゆっくり楽しむことができる。



— これからの日本の展望

古屋敷: さっき楽屋で話していたときに、東海生時代はすごい自由があって楽しかったと言われていました。社会情勢が変わってきたとは思んですけど、それを踏まえて、これからの日本や、アニメ界の展望についてどう思われますか。

鈴木P: テーマが大きいですね(笑)。日本という国も戦後75年かな。管理体制が隔々まで行き届いて、それでみんな頑張ってるでしょ。それでこれからどうなってるかっていうとね、1回作ったものを壊す時代が来てるんじゃないかなって感じが、実はしている。そういうこと言う

と、面白いね。そうだな。もう1回自由な時代が来る。楽観論だと言われるかもしれないけれど。

半藤一利という方がいる。僕の大好きな人で、いろいろと会って話をすることがあった。ペリーが浦賀にやって来て、日本は開国しなさいと迫られた。計算してみてください。日清・日露(戦争)が終わったのが1905年。だいたい1900年とすると、ペリーがやって来てから45年。そこから太平洋戦争が終わるまでに45年。ペリーがやってきて日本は新しい国作りが始まった。その頂点が1900年。日本はそこから45年かけて作った国を壊した。では次の45年は? 1945年からバブルの崩壊まで。戦後にまた新しい国づくり。それが終わったのが1990年。次の45年後は2035年。つまり今、国を壊している最中。完全に国を壊して新しいものが始まるのは、たぶん2035年頃。その言葉を残して半藤さんは亡くなった。

つまり、もしかしたらここから日本は変わる可能性がある。僕もすごい賛成です。これだけいろいろな支配体制が確立しちゃったら身動き取れない。人間というのは、自然淘汰がうまくできてる。そういうことが起こると、必ず壊す人が出てきて、新しいものが始まる。だから、ここから10年ちょっとで、本当に面白い時代になると僕は思っています。どうでしょうか(笑)。



講演後 楽屋インタビュー

講演後、楽屋までの移動中、まず3人への労いがありました。「みんながいてくれて助かった。3人とも『カリオストロの城』を観てないというのが良かった(笑)。世代の差って、こういうところに出るんだな。」と、意外にも若い世代とのギャップを面白がっていらっしゃいました。

楽屋では改めて3人を称賛し、彼らが人前で話すのに慣れていることにも言及。彼らからの、「裏話が聞けて濃い時間だった」との感想に、「表面的な話しかしないの、嫌なんだよ。」とカラッと答えていらっしゃいました。

講演を振り返り、質問にもあった「もう一回作り直す時代が来る」という半藤一利さんの説が印象に残った人がいることを意外に思われたようで、ここでは高校生も持論を展開。「人は負担がないと成長しない。戦争という重い負担があって日本は急成長を遂げたとも考えられる」と。しかしそれを理由に戦争を是とすることはできないことも重々承知で、その代わりとしてコロナ禍が起きているのでは?などと意見を交わしていました。作っ

ては壊し、壊しては作るを繰り返す45年周期について、半藤さんの本を勧めていらっしゃいました。

続いて、講演で話そうと思ったが話せなかったことを話してくださいました。(以下簡単に紹介します。)

鈴木P:現代人をみていると面白い。僕らの世代だと、60年代というのがあって、その10年で色んなものが全部変わった。色んな人が都市へ集まるのは1960年から10年間。盆と暮れ正月に故郷(くに)に帰る習慣はそこから。それまで日本人には故郷へ帰る考えなんてなかった。1960年代は世界的に技術革新の時代で、みんな変わった。同じ時期、イギリスなんかもみんな都会に出た。ところが日本と違うのは、一家全員で行く。おじいちゃんおばあちゃんも。長男も残らない。だから自分の故郷を本当に捨てる。こういう家族社会学を勉強すると結構面白い。エマニュエル・トッドが世界の家族社会学を研究していて、国によって一家を継ぐ人が違う。アメリカのように親が優秀な子どもを選ぶのは合理的。日本ではずっと長男。フランスは子どもに等分。東南アジアではみんな長女が全部を受け継ぐ。その代わり全員の面倒を見なきゃいけない。だから男が働かない。男女問題って、そうやってみていくと面白い。学生時代に本多勝一さんがアラビアのことを語ってくれた。一夫多妻制も貧困とは関係がない。男と女の生まれる比率が違う国や地域があって、男に対して、女性が多ければ、一夫多妻制。そうじゃないと困るし、逆に一妻多夫の地域もある。世界って面白い。そこにはその論理がある。亭主が第二夫人を持つことを願う奥さんもいて、これは豊かって意味。社会学や家族形態って面白い。上野千鶴子さんは「近代家族の成立と崩壊」って本を書いていて、かくして近代家族は成立し、そして崩壊した、って内容。男が威張る社会って日本では少なく、伝統的に女の方が偉くて、威張っていた。

そこで、社会学は映画作りにも役立っているのかをお聞きしたところ、ジブリではやっていない、とのこと。ただし、宮崎駿さんと話すのは、そういう本の内容で、何かのヒントになる時があると教えてくださいました。本好きの宮崎さんは、古今の児童書をすべて読んでいて、評論はあまりお好きではない。今でも児童書を毎月最低でも5~6冊読み、鈴木さんは社会学の本を読んで、二つをドッキングすると結構面白くなるとのことでした。

話は広がって、江戸時代に始まる専業主婦の話から映画作りへ。昨今の中食は、働く主婦が増えたことで始まったことかと思いきや、江戸の町ではお惣菜は買ってくるものであり、一般家庭で惣菜を作るのは60年代の生活革命が起ってから。

鈴木P:そういうことが映画の一場面になってしまう。

例えば家族がいて、さあご飯だっていう時、惣菜屋さんで買ってきたものと自分で作ったものを合体させる。そうすると時代は表現できる。例えば「耳をすませば」でいうと、団地の中を、宮崎は本当に真剣に考えていました。朝、みんなでご飯を食べる時、お父さんがいて、雫がいる、お母さんもいる。そうすると、誰々の立ち位置はどこだって。真剣に考えるわけ。雫がいて、お姉ちゃんがいるでしょ。あの部屋は部屋を二段ベッドで区切っていた。あれ、俺んちだったんだ。それを宮崎駿に話すと、それいいよって。真ん中にベッド置いて、そこに机置くんだけ。って。6畳かかって話し合う。そういうことが大事。雫は天沢聖司が好きとかどうでもよくて、まず、生活の基盤を明らかにする。結局毎日みんな何食べているかってことが大事なんだよ。他にも「耳をすませば」で、お母さんは台所でワープロを使っているけど、ワープロのデザインをどうするかで大変だったんだ。

岡本さん：もう一回見たくなった！

鈴木P：もう一回見ると面白いんだよ。

最後に名古屋で育ったお話も。お生まれは昭和区の元宮。元・「宮」だけに宮さんと関係があったのかな、なんて笑っていらっやいました。お母さまが東海のすぐ近くのご出身で、赤荻で過ごした時期もあり、その後徳川町、黒川と引っ越し、東海へは黒川から通われていたそうです。先日徳川園に行く用事があり、道に迷ってしまったが、たまたまご自分が育ったところに出たので、なんの気無しに歩いてみたら、知り合いの家があって、ついでベルを押すとその息子さんが出てきて、本日の講演後に65年ぶりに知り合いに会うことになったそうです。

東海時代は楽しくて、面白い学校だったと。自慢はなんと、6年間で成績が1番から最後まで、10番おきに全部取ったこと。それぞれの人たちの気持ちがよくわかる、そしてそれが仕事で役に立ったと、終始明るく笑っていらっやいました。

インタビューにインタビュー

どんな準備をしたか？ また、実際にインタビューしてどんな感想を持ったかをインタビューの3人に聞きました。

高尾君

僕はジブリを見ておらず、対談に誘われた時、まず鈴木敏夫さんがどなたなのかわからなかった。本をもらって読んでいくうちに、想像以上にすごい方だって知った。僕はエンターテインメント系の仕事に興味があるので、聞きたかったのは適性の部分とか、プロデューサーの仕事

の部分。しっかり本を読んで、質問も作ったが、時間の関係もあって、満足いくまでは聞けなかった。感想としては、鈴木さんほどのすごい方は、言葉に表せないのだと思う、多分。質問の答えは、想定していたことの斜め上行く答えが多かった。そして最後の結論を僕達に任せている。必ずエピソードトークから始まる、その理由はわからなかったけど、すごく面白かった。言葉で言い表せないものを持っているから、この方は天才なのだろうな、ってことがわかった気がして、新しい発見があった。

岡本さん

私はジブリ好きでよく見てて、でも宮崎駿さんの名前しか知らなかった。作品としては見るけど、そのプロセスに何があるのかにはあまり興味がなかった。インタビューが決まって、本も読んで、勉強してみようかな？って。感想は「感性」だなど。なんでもやる気でどうにかなるのだから。講演中の「(スタジオジブリは)上手く行くと思ったから」って言葉が一番心に残った。やっぱり人生そんなもんかって思った。私は昔から強い女、強い人間になりたいくて、自立して生きていける人間になろうと思っている。魔女宅が大好きで、特にキキが好きで、あんな小さな女の子が一人で知らないところに修行に行く。そこで自分の居場所を見つけていく感じとかが好きで、そういう風に生きていきたいなって思う。

古屋敷君

申し訳ないくらいジブリをそんなに知らず、あまり準備に時間を割けなかったが、鈴木さんの人柄のおかげで僕もすごく楽しく参加できたと思う。僕も本当に鈴木さんが誰かわからなくて、でも誘われたし、やるかあ！という精神できた感じ。鈴木さんはとにかく博学で、知識量がすごくて、好奇心もすごくて、バイタリティに溢れていた。そういう人になりたいな、って素直に尊敬できた。(講演の)最後に「日本の社会がどうなりますか？」と質問した。自分でものを作ってきて、いろんな時代・社会を経験して成功した人にとって、これからの日本はどういう風に映るのかなってというのが聞けてすごく嬉しかった。45年周期とか僕と若干発想が似ているところもあった。

編集後記

お話をできるだけ詰め込むため、文字を小さくしたことをお詫びします。アンケートで大絶賛の講演でした。楽屋でも自由闊達でありながら、気遣いが自然で、まさに人を活かす一流の方でした。幅広い知識が次々と湧き出し、聴いているこちらも知的好奇心が大いに刺激され、得難い経験をさせていただきました。インタビュアーの奮闘や興奮も伝わったのではないのでしょうか？